

スワヒリ語専攻

スワヒリ語専攻では、東アフリカのスワヒリ語のみならず、広くアフリカの言語や文化、そしてアフリカが直面する同時代的な問題について学んでいきます。アフリカの言語に関心がある人はもちろんのこと、アフリカを通して世界のグローバルな問題について考え、取り組んでいきたい人を歓迎します。



キリマンジャロの雄姿

アフリカには2000近くの言語があります。その中でも、スワヒリ語は最も主要な言語の一つです。スワヒリ語は東アフリカの共通語として、タンザニア、ケニア、ウガンダなど10カ国以上で話されており、話者数は7千万人を超えています。タンザニアとケニアの公用語であり、東アフリカ諸国の学校教育やマスメディアで用いられている重要な言語です。

本専攻は日本で唯一、学部からスワヒリ語を専門科目として学ぶことができる場所です。そして、スワヒリ語を入口としてアフリカの言語や文化、社会や政治について広く学んでいきます。

スワヒリ語の他に、ナイジェリアの主要な言語であるヨルバ語やハウサ語、コンゴ民主共和国のリンガラ語やコンゴ語などを学ぶことができます。また、アフリカの社会や政治経済、文化、文学などに関する講義科目があり、現地でフィールドワークをおこなっている多彩な研究者から、アフリカのさまざまな民族や社会の様子を知ることができます。ゼミでは、アフリカの諸問題や言語・文化について、各自が興味をもつテーマを選び、みなで議論する中で考えを深め、卒論へと仕上げていきます。

アフリカは現在55カ国を数え、急速な経済発展を見せる一方、植民地時代の負の遺産を背負ったまま、貧困や政情不安、紛争など多くの問題を抱えています。グローバル時代の現代にあって、遠く離れている日本も、アフリカの現状は決して無関係なものではありません。アフリカを深く理解し、アフリカとの関わり方を考えていくことが、国際社会の一員である私達にも求められています。スワヒリ語を学ぶことから、その第一歩を踏み出してみませんか。



スワヒリ語専攻は仲がいいよ(夏まつりにて)

「ハバリ ガニ?」

Habari gani?

学生の声



3年 川上 凌

私が初めてアフリカに触れたのは、小学4年生の時に開催された愛知万博でした。アフリカのパビリオンに入館し、アフリカの人と言葉を交わし、握手したことは今でも鮮明に覚えています。幼い私にとって、黒人の大きな手のひらが印象的でした。今思えば、私がアフリカに対して興味関心を抱き、いつからか魅了されていった最初のきっかけはこの万博にありました。

スワヒリ語専攻で学べば、アフリカに関する様々な事象を動的かつ複眼的に捉え、自分なりに考える機会に数多く巡り会えます。アフリカは語り尽くせない程に多様性に満ちた大陸であるがために、学ぶ上で困難や戸惑いを伴うこともあります。しかし、これは奥深い学びの裏返しであり、紛れもなくアフリカが「多面体」であるがゆえのことです。例えば、先程の万博の件についても、アフリカの展示方法の変遷を辿ることで、アフリカに対して一体どのような眼差しがこれまで向けられてきたのかについて考察できます。また、スワヒリ語専攻での学びは机上に留まりません。スワヒリ語劇を初め、皆でアフリカ料理を作り、時にはアフリカ音楽の生演奏を聴くこともあります。聴覚や味覚までも動員する授業というには大学ではそうそうお目にかかれません。

アフリカに対して無意識に設定されていた視点を取り払い、同時代を共に生きているアフリカ人自身の視点から、アフリカについて皆と共に学べる環境が喜びと充実を与えてくれています。



スワヒリ語劇をした仲間たちと

留学体験記



4年 今村 由夏

私はタンザニアのダルエスサラーム大学に10か月間留学しました。アフリカ、タンザニアと聞くと、貧しい、危険というようなことを思い浮かぶかもしれませんが。しかし私が10か月間タンザニアに暮らして知ったことはそのようなものではなく、人情味あふれるタンザニアの人々の温かさでした。

留学中は、大学の寮の二人部屋にタンザニア人の女の子と暮らしていました。当初、スワヒリ語がまだ拙い私にスワヒリ語や文化を教えてくれ、断水や停電が頻発する生活での知恵などを教えてくれました。大学ではタンザニア人と同じ授業を受けていたので、難しく理解が追いつかないこともありましたが、その時には必ずクラスメイトが助けてくれ、自分の時間を割いて私に教えてくれることもありました。

学業以外にも様々な経験をしました。仲の良い友人の実家に招待され、2週間ほどお世話になったことがあります。そこはダルエスサラームからバスで10時間ほど南西に進んだ、標高約1500メートルにある小さな村でした。彼女の家には水道も電気もありませんが、肌寒い朝にはお母さんが温かいチャイを用意してくれたり、夜にはシャワーのためにお湯を沸かしてくれました。「あなたは私の子どもよ」がお母さんの口癖で、見返りを求めない彼らの温かさに触れました。留学中は大変なこともありましたが、それをカバーしてあまりある経験や出会いは、私にとって忘れられないものになりました。



実家に招いてくれた友人のティナと